

「人生と文学」

川越市 小林茂樹

人生を考えてふりかえってみたときに、生きる・働く・暮らすという視点で意識したことは、仕事であり、結婚であり、勉強したということであるが、そういう生活感覚のなかでの文学といえば、私にとって多くは、芹沢光治良文学作品であり、それを傍証する資料であったといえる。とてもわかりやすく魂に沁みいる作品に出会えたことは自分の生き方にも影響したと言えるし、何よりも絶対的に信じられたことの喜びが大きかった。

現役を退いた身になったが、それでもいちばんの想念はやはり仕事のことである。会社員の立場での仕事ではあったが、組織を横断して、いろいろな役割を演じてきた。が、どんな舞台に在っても、「何事によらず一つの仕事というものは、その人の全精力を打ち込んではいけないものであり、自己をなげ出し、力も魂もこめてかかれば、仕事には歓喜が伴いませんし、成功をいたしません。歓喜が伴わずに、ただ日々生きるだけのものを得るのだと自覚して、一つの仕事をを選ぶのは一種の墮落であり、愧すべき卑屈だと信じます」という芹沢先生のお言葉がいつも重くのしかかっている、その精神でへこたれないように努力してきたように思うし、それ故に能力を超えることでもこなせてくれたように思う。

幸せだったことは、在籍する会社が立派な企業体になることを目指し、自ら足かせとなってしまう「人間尊重」の理念を掲げ、企業は、人は、何のために存在しているかということに自覚しあって、みんなで夢を掲げ、その「夢の実現」に全力を尽くせる環境が保たれたことである。そして、勤労の義務を果たす上での根本的な規範と思われることであるが、芹沢先生の短編小説「天蓋のもと」を地でいく風土でもあった。この作品は勤労者の心得を説いたもので、権力欲での私物化を戒めたものであるが、公私混同の無い環境で組織のリーダーに徹して、人を信じて、常に全力を尽くし、達成の喜びを分かち合い、やった甲斐があったという満足感を感じてくれた。そういう風土を定着させた会社であったことに感謝するばかりだ。

「天蓋のもと」という作品は、異業種交流会の仲間たちにもコピーを進呈して感想を求めて話題にしたことがあるが、漢字が難しくて読めなかったよ。から始まって、しかしみな真面目な感想を寄せてくれたことで、交流の絆が深まったという思い出にもなった。

ただ、本音で考えてみて、人生を楽しんでこれたかと問えば充分ではない。楽しむゆとりをもてなかつただけでなく、楽しみ方を知らないまま過ごしてきたようにも思える。いま取り返そうとしたところで、年代に応じたことしかできないので悔いも残っている。

結婚ということについては、これは「生きる・働く・暮らす」全部にかかる重要なことであるが、これも芹沢先生に救っていただいたような感を抱いている。

結婚の理念について、芹沢先生は作品中で次のように述べている。

「フランスでは夫婦は文字通り一体で、二人とも常時同じ方向を向いていなければ、結婚生活が不可能であったが、日本では夫婦は男女別人で、たがいにとちらを向いていようと、同じ屋根の下に暮らせば成立した」と。そして、昭和初期のことであるが、フランス

留学時に結核にかかって療養し、主治医から、社会復帰をゆるされたので、第一にすべき義務として、妻の切なる要求を容れて、海気を怖れながら神戸港まで送り、約束通り離婚して、それで、身軽に独身になって、横浜から同じ船でマルセイユへ帰ろうと決意した。そういう心の軌跡を基にして、後に、後輩の結婚式場で次のように語っている。「私は自分の経験から申しあげるのでありますが、結婚生活というものは、どんなに善意をもって致しましても、決してお天気のいい日ばかりが続くものではありません。時には今日のような雨降りの日もありましょうし、不幸に直面して、いわば嵐のなかで木の葉のようにもまれなければならないときもあるのではないかと思います。そういうときこそ夫は妻を、妻は夫を、杖とも柱とも頼む人だと思ふべきではありますが、それが必ずしもそう思うとは限らない。その程度の不幸なら、あるいは底の知れたものかも知れません。ある程度の夫婦げんかは、どの家庭にもつきものでありましょう。いや、それよりも、むしろあんまり思うようにいかぬために、夫婦がお互いに深刻な憎しみを感じ、どうしてこんな人と一しょになったのかと、自らを憾むことさえあると思います。場合によっては自暴自棄になって、相手を殺してやりたいと思うほどに、その憎しみは深いかも知れない。しかし私は申し上げたい。そのときにももし憎しみのなかで相手の心を見失い、離れ離れになってしまったら、それっきりです。そういうときこそ、自制して憎しみをおさえ、とにもかくにも別れてしまつてはいけない。しっかり相手の心を掴んで、決して離さぬだけの覚悟が、とりもなおさず愛情なのではありますまいか。今日このよき日に、愛情を捧げあうことを誓うのは、幸福のときのためばかりではないはずです。そういう不幸な日こそ、今日のおふたりの幸福と、みなさんの心からの祝福とを、どうかお互いの心のなかに喚び起こして頂きたい。そしてほんとに今日のことを忘れずに生涯を契って、末長くおふたりの愛情を貫き通して頂きたいと思います」と。

私はここに「人間愛の魂」を感じ、そして、こころが疼くたびにこのことばを思い出し、金科玉条として守るように自分自身に言い聞かせてきたといえる。

結婚は人生の土台であり、これがしっかり定まらなければ、仕事も勉強もうまくはこぶことはできないし、そこから逃げようとしても、逃げ場は無いのではなからうか。

勉強したという想いについて言えば、知識の吸収が前提であることはもちろんのことであるが、体験することですぐたいへん大きなことを学ぶということを実感してきた。人間は「現場・現物・現実」に遭遇し、確認作業を通じて成長していくものだという考えが信念にすらなつた。芹沢光治良先生の場合は最初に理論ありきで、それを十分に認識させられる論文も少なくないし、読ませていただく都度、足元にも及ばない自分に気づかされてきたが、及ばないことを残念に思つてもどうすることもできない。ただ、先生の作品はすべて具体的でわかりやすい内容であるので、私も、これを目ざして、観念的な考えを排除し、何故、何のためにという部分をきちんと解説して具体的に説明できるように心がけてきた。そして自分の力だけで何かを遺すというようなことはできないので、総合力の成果を信じて、そこに自分を捧げる生き方に意義ありとしてきた。勉強してきたことはいろいろあるけれ

ども、仕事上の必要性から専門的なことはもちろんあるけれども、いちばんだいじな学習は、人間探究だと感じられていたので、芹沢文学作品はずいぶんと役立った。

芹沢光治良文学作品から学んだことに的を絞るならば、一番の強い想いは「信仰」ということについて学び得たように感じる。とだけ述べるにとどめたい。

作品に登場する人物像のなかに、興味がわいてしまって、いろいろ調べるということも体験させていただいたが、なかでも、井出国子という神がかりの女人を知って、神秘的なことがらへの理解も深まったが、さらに、大正初期の大平良平という傑出した人物の見識にもふれることができたことは、私の人生をとて豊かなものにしていただいたことで、ほんとうに幸福感を味わえてよかったと思う。

また、芹沢先生の思想の根幹というべきか、生き方の原点にふれた思いがあるが、「人間って何だろうか」と自らに問うところから出発して、その人間の育んだ文化とは何か、文明とはどういうことなのか、いまある文化や文明が人間を幸せにするだろうか、人間の将来を信じられるか、やがて死ぬときに楽観して死ぬるか。

ことばをかえれば、文化や文明が人間を幸福にする力がないのならば、今まで自分がやってきたことは無駄であったのか、何だったのかという人生への問い、人間の尊厳を守ろうとする愛情が感じられて勇気がわいた。

人生において、社会的な、歴史的ないろんなことにぶつかったときに、ほんとうの人間というものがわかる。人間とは何だろうかということがわかる。そして、歴史は繰り返すけれど、変化がある。繰り返し方に変化がある。その変化がなければ生きていられない。人間が存在する理由がない。

私も欧米の現地文化に接したことがあるが、そのときの心象を言えば、国が在って国民があるのだということ強く感じたし、日本という国に潜在するたくさんの魅力的な要素を意識したことであるが、日本という国の存在理由を確かなものに高めたいとの欲求を覚えたが、そんななかで、今をみて、この社会をみて、私たちは楽観して死ぬるか、みんなが自らに問うことが求められているのではなかろうか。トレンドの変遷を観て、時代の変化の大きさを感じる中で、戦後六十年も経過するのに、社会や人間の理想像のようなものを創ろうする気運が、この日本にいまだに生まれていないばかりか、「人間愛の魂」とか「理念」が失われてしまって、みんな現実家になって流されているだけの感に憂慮する。こんな時代に、どんな風に生きたらよいか、どんなところで生きていくべきか、永遠に生きる生き方はないかと、ほんとうに知りたいと思う。これからも芹沢光治良文学作品の中にその答えを求めていこうと思っている。